

塚本 薫子 さん (49歳)

営農地: 北九州市小倉南区
主な農産物: 野菜 (施設、露地)



常に消費者のことを考えることが大切

● 就農のきっかけ

学生時代の夢を彼氏のもとで実現

東京のサラリーマン家庭で育ち、高校時代は社会福祉に興味を持っていた塚本さんは、「人間、食べ物がないと始まらない。」と考え、東京農業大学に進学、この大学で2学年下の現在の夫の茂さんと知り合いました。卒業後、塚本さんは群馬県のきのこ会社に研究員として就職。茂さんは福岡の実家に帰って農業を継ぎました。交際は遠距離となりましたが、「父親が夜遅く帰宅、朝も早いため、毎日帰っているのになかなか会えなかった」子供時代の体験から「やっぱり夫婦同じ仕事して子供にも父親が働いているのを見せたい。」との思いで半年後に茂さんとご結婚、夫とともに農業の道を歩み始めました。

● これからの夢、目標

消費者への提案と新たな柱の創出

今、市民生協の消費者を対象に農作業体験の取り組みを行っています。きっかけは、10年ほど前に店舗との意見交換を通して考えた「おいしいものを届けようと収穫時間や予冷等日持ちに気を使っているが、小売り段階でも気を使ってほしいし、消費者にもより一層保存方法や食べ方等の提案が必要だ。」との思いから。今後もこのつながりを大事にしていきたいという塚本さんです。

さらに、今の農業は「品目の選定」と「売り先の確保」がいかに重要かについて身をもって体験している塚本さんですが、消費者の変化等を肌で感じ、今売り上げの8割を占める小カブと枝豆の両方について品目の切り替えを考えています。主力品目をいかに売るかのみでなく、思い切った品目転換も長く続けていくうえでは一つの選択肢なのですね。

● 私の今～就農後の道のり～

施設園芸の苦難を乗り越えて

塚本さんがご結婚したころは米と露地野菜だけの農業で、思うように売り上げは上がっていませんでした。そこで結婚を機に後継者の農業融資を利用してビニルハウスを3棟(1000㎡)建設。トマトづくりをスタートさせました。平成3年までに2500㎡まで拡大していましたが、風の通りが良い土地柄が災いし、その年の秋に襲った台風により後で建てた1500㎡分のハウスが壊滅。それを経験した塚本さん夫婦は平成5年一念発起して1700㎡の鉄骨硬質ビニルハウスを建設、現在の規模に至っています。

二人で始めたトマトでしたが、平成10年ころには市場に供給過剰で単価が低迷、新たな経営の主力を求めて試行錯誤を繰り返しました。そこで塚本さんが目を付けたのが枝豆でした。こちらでも低迷しており家族の大きな反対にあいましたが、「中学生のころに食べた新鮮な枝豆の味が忘れられない! おいしい豆を作れば売れる。」との思いで栽培を始めました。良心的な福岡市内の青果店との出会いも手伝って新たな主力品目に成長。消費者目線での成功事例となりました。



プロフィール

- 家族構成 / 本人、夫、義父、子3人
- 営農年数 / 約25年
- 耕作(経営)面積 / 2ha (ビニルハウス2000㎡、鉄骨硬質フィルムハウス1700㎡)
- 販路 / 市場、JAのインショップ、青果店相対取引

就農を考えている女性へ ♥

思った以上に体力がいるし、自分が動かないと何も始まらないのが農業です。でも、疲れ切ってしまうまで農作業を行うと売ることまで気が回らなくなってしまいます。如何にゆとりを持ちながら、販路を開拓し、食べ方の提案で消費者へアピールしていくかを常に考えていくことが今からの農業に必要なかと思っています。